

# 北 どりくろあ

第114号 2025年9月1日 (毎月1日発行)

郷土の本棚⑱ (文責・赤川仁洋)

## 「革命前後」 火野葦平著

ひのあしへい

### 時代の渦に翻弄された文学者の矜持

本書は昭和35年1月30日、中央公論社から刊行された。火野葦平の死から6日経っていた。享年52歳。死因は当初、心筋梗塞と公表されたが、12年経った昭和47年13回忌の日に、睡眠薬による自殺であったことが遺族によって明らかになった。戦争に翻弄された人生の思いの丈を吐き出すように、自伝的小説「革命前後」を書き上げたあとで、火野葦平は燃え尽きるように命を絶ったのである。

小説の舞台は、九州・博多の川島ホテル。陸軍に接収されて、西

部軍報道部の宿舎に割り当てられている。本土決戦で真先に敵兵が上陸してくるであろう九州の地で、戦意高揚の報道活動のために組織された部署で、作家や映画監督、音楽家に画家と、さまざまな文化人が徴用されている。敗色濃厚の中、本音や建前が渦巻いて、魑魅魍魎が跋扈する伏魔殿の様相だ。中には九州を独立させて軍政を布き、革命政府を作って米軍を迎撃しようという動きもある。戦局はますます悪化、昭和20年8月6日広島市、同9日に長崎市に新型爆弾(原爆)が落されて焦



火野葦平(昭和34年12月撮影)。「革命前後」(中央公論社)より転載

土となり、同15日、ポツダム宣言を受託して日本は無条件降伏する。軍国主義国家が壊滅、真の革命が起ったのである。終戦の2日後に、西部軍報道部は解散する。

妻子が疎開している母の生家を、辻昌介(火野葦平の仮名)は戦後になって訪れる。一週間ほど滞在するのだが、そのときのこと

が詳しく書かれている。「正確に言えば、広島県比婆郡峯田村字峯、山陽線を広島で乗り換え、芸備線の庄原で降りる。そこからバスで約二時間、降りたところからまた二里ほど、やや登りになった細い道を歩いて入らなければならぬ。谷川に添って行くと、両方の山が次第に逼って来て、ど

んづまりになったような山峡の口に、谷口家はある。」

「母松江(マン)が生まれ育った家である。よくもこんな草深い田舎から北九州へ出て来たものだ。元来、広島県はアメリカ移民など、

県外へ出稼ぎに行く者が伝統的に多く、松江も将来はブラジルに渡って、大農場を経営する夢を抱いて、十九歳のとき、この田舎を飛び出したということであった。しかし、門司で沖仲仕をしているうち、辻安太郎(玉井金五郎)と知り合い、結婚して若松に住みついでしまったのである。」

その老母は、周囲の家々がみんな避難しても、お手伝いの娘一人

を伴って戦時中の若松の家を気丈に守り抜いた。B29から落された小型爆弾はコンクリートの塀をふっとばし、水道管を破壊したので、噴水のように水がとびだして洪水のようになった。四発の焼夷弾の直撃は三発が不発、一発が屋根を貫いて廊下に落ちて燃え始めたのを、松江が女中を指揮しながら、濡れ簀を数枚かぶせて消しとめてしまったという。

辻昌介一家を帝釈峡に案内した和尚さんの話が、松江の剛毅な性格の由来を示唆しているように思える。

「どうも谷口家は平家の落武者の流れのようにありやす。きびしい源氏からの追討の眼を脱れて、平家の残党は日本全国をさびしい奥地へ逃げこんだわけじゃが、この帝釈峡にもどうやら来た模様でがんです。(中略)それで、谷口家の祖先も平家らしいが、ハッキリとしたことはわからん。この前、古い墓を調べとって、紋がどうもおかしいもんじゃけえ、わしはそれにちがいなアと鑑定したわけががんです」

「すると、僕も谷口家の流れを汲んだるわけですから、敗戦の落武者というわけになりますね」

火野葦平の甥に、アフガニ

スタンで武装勢力に銃撃されて死亡した中村哲医師がいる。戦乱と干ばつに苦しむアフガニスタンで、36年間に渡り人道支援活動を続けた中村哲氏にも、平家の血が流れていたのだろうか。

火野葦平は昭和13年、「糞尿譚」で第6回芥川賞を受賞。出征中だった葦平は、駐屯地の中国・杭州で賞を受け、注目される。その話題性を目をつけた陸軍は、いやがる葦平を陸軍の報道班員に仕立てあげる。本物の兵士である葦平に従軍させて、戦場の物語を書かせたのである。同年に発行された「麦と兵隊」は大ベストセラーになった。

列強国の植民地として隷属するアジアの国々を解放して、「大東亜共栄圏」を作るという理想を信じた火野葦平は、戦意高揚の物語を書き続けた。それは戦後、戦争協力者として、



函や本の装丁は中川一政画伯が担当



「葦平と母マン」のカバーには、谷口家を描いた寿山五朗氏の水彩画が使われている

激しいバッシングを受けることになる。葦平は昭和23年、「公職追放令」の対象となり、文筆家追放処分を受ける。それは、昭和25年に解除された。

「革命戦後」では、辻昌平（火野葦平）の若松の家に尋問に来た進駐軍の将校に、本心をぶつける場面がある。

（前略）恐らく私がお人よしの馬鹿だったのでしょうか。軍閥の魂胆や野望などを看破する眼力がなく、自己陶醉におちいって、墓穴を掘ったのでしょ。しかし、私は私なりに戦争に協力したことを後悔しませんが、敗北したことは残念でありましたが、私の気持は勝敗にかかわらず今も変わっておりません」

筆を折った辻昌平は、西部軍報道部時代の仲間からの誘いで「太平街」という飲食店街の造成や「九州書房」という出版社を立ち上げるが、人の好い昌平は利用されるばかりで経営

者としての資質は皆無、いずれも頓挫してしまふ。

自分には文学しかない。そう自覚した火野葦平は、「革命前後」の時代を乗り越えて、精力的に作品を発表するようになる。父と母をモデルにした自伝的小説「花と龍」は、読売新聞に昭和27年から1年間連載された。映画化も何度かされている火野葦平の代表作である。

「暗い谷の底である。四方の山がきりたっているの、この部落には、朝の光線がさすのはおそく、日の暮れるのも早い。まして、日の短い秋であるから、まだ三時というのに、もう黄昏のようだ。部落の名は広島県比婆郡峰田村字峰。

はげしいせせらぎの音をたてる谷川の岸で二人の若い村の娘が話している。健康そうなのは共通しているが、マンの方は丸顔の小柄……。」

冒頭に、男まさりの娘マンが登場する。このあたりのことは「葦平と母マン」（寿山五朗著、1997年発行）に詳しい。

寿山五朗氏は「庄原火野葦平と母マンの会」を結成して、庄原市での葦平親子の行跡を丹念に掘り起こして記録に遺した功労者である。

今年の8月15日の終戦記念日の前後に、わたしは「革命前後」をじっくり読んだ。ひしひしと伝わってくるのは、時代の重苦しい空気である。戦時下では、戦争に否定的なことを言うのは絶対のタブーである。憲兵隊に検挙されるのも恐ろしいが、戦死していった英霊たちの行為が無価値であると言っているようなものなので、遺族から怨嗟の目を向けられる。

戦争が始まってしまえば、双方に正義があり、恩讐が絡めば倫理よりも感情が優先されてしまふ。時代の巨大な渦の中では、個人は無力で抗えない。されど、その渦を起こすのも人間の自分勝手なエゴなのだ。

火野葦平の「あとがき」の言葉が心に残った。

「私は、毀誉褒貶はともあれ、この『革命前後』を書きあげたことに或る満足をおぼえています。時代の流行や風潮の目まぐるしさには、いつも背を向けるようにしながら、やはり、時代におくれないうように心がけながら、私は私流の道を歩いて行く他はありません。」

寄稿エッセイ

# 「雨柱と山津波」

高柴順紀（菊栽培農家）

地震や豪雨などの自然災害が報道される毎日だが、それでも自分は大丈夫だろうと皆思っている。しかし、我々の身近でも紙一重の差で危険は起きている。記憶に新しいのは平成二十二年七月の「庄原豪雨」だ。西城町大戸を中心にしたごく狭い範囲で集中豪雨が起り、甚大な被害を出したがその時の報道写真が忘れら



れない。庄原市内から撮影された「雨柱」だ。それは明るい空と真っ黒な雲との差がくっきりと分かれ、容赦なく雨が柱を立てたように落ちていた。人びとの営みとは無関係で、自然は美しく勝手なものだと思いが知らされた。

県内各地にも多くの水害碑が後世に伝えるべく残されているようだが、どこでも当たり前に起きていたということか。私の村には水害碑はないが、昭和十七年に内藤正氏が個人出版された『広島縣八幡村自治五十年志』に「明治十一年六月ノ山津浪」の記載があるので紹介する。この村史は各種資料を丹念に集めた優れた文献として知られているが、この山津浪（土石流）の記述部分だけは著者の思いを存分に吐露している。

「明治十一年虎ノ六月二十三日ニ當地方未曾有ノ大洪水アリ時ノ人之ヲ山津浪ト云フ、・朝来ノ降雨ノタメ川床一杯に出水シタルニ夜半ノ頃俄然異様ノ地鳴ト共ニ各地一斉ニ山崩

レトナリ其土砂悉ク河水ニ加ワリ水勢頓に高大トナリ稀有ノ大洪水ト成リシモノナリ翌朝四方ノ山々ヲ見レバ山色全ク一變シ一面ノ青山ノ上ニ天筆ヲ振エル大書ノ如ク谷ト云フ谷ハ大トナク小トナク悉ク噴出シタル山崩レノ土砂流レ注ギシ跡恰モ煙火ノ流星ヲ打揚ゲタルガ如ク或ハ高ク或ハ低ク大小夫々並立セル畫面ト化シ其奇景言語ニ絶ス・」。この後は東城川上流から西城川上流域が被害にあい、地元の村では三名が死亡したなどと詳しく述べている。

「洪水ノ惨事ハ數多キ事ナガラ山津浪ト云フ異様ノ洪水ハ眞ニ稀有ノコトナリ記シテ以テ後世ニ傳フ」と終わっているのだが、昭和四十五年八月十八日、事もあろうか我集落が再び経験することとなった。

それは稲穂が出揃った時期で、丁度台風九号が数日前に通り過ぎた穏やかな日であった。集落の年寄りたちはお寺の施餓鬼に参り、まだアルバイトも少ない時代だったので百姓仕事を皆していたと思う。昼過ぎ何時もの夕立が来たかと思いい家に入ったがなかなか止まず、それどころか辺りが暗くなって土砂降りが続くのがあった。田の水は溢れ、畦を超えて下の田に瀧のように流れ落ちた。大

川に合流するまで二キロもない集落の小川も水が増し、次第に濁流となり川沿いの田んぼは石や砂はもちろん流木も入った氾濫原となってしまった。

この自然のイベントも数時間のことで、夕方には空は晴れ何事もなかったような天気となった。しかし土橋の全てが流れ、生活道も寸断されたためお寺参りした年寄りが家に帰れず、途中の家で一夜明かした人もいた。人的被害が無かったのがせめてもの幸いであった。

写真を見てほしい。組内総出で、復旧工事がされるまでの仮の道を作っている姿である。自助する力があつた時代でもあつた。当時、年に一度は道打ちと称して皆で道直しをしていたので、特別なことをやっている思いはそれほど無かつたと思う。何時も道打ちが終われば若い者は山を越えてヤミ酒を買いに行かされていた。地元で酒造メーカーが在ったのではあるが。

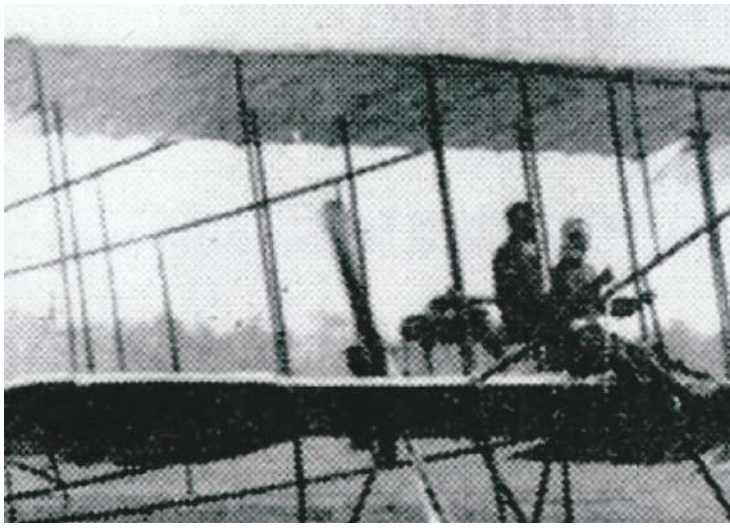
私事で恐縮だが菊に被害はなかった。しかし我が家の土橋も流されていたので代わりに丸太を三本渡していた。二か月後、今は亡き妻のタンズなど嫁入り道具を親戚の人たちが背負ってこの上を渡った。

## ハロー注意報②1

### ——進駐軍がいた町のはなし

# 別世界を見た若き日の祖母 松岡初枝

時代は遡って明治時代。祖母が生まれて八年目の明治四十四年（一九一一年）埼玉県所沢に日本初の飛行場ができた。陸軍の飛行場として作られた理由は、東京に近く、平坦な地形と落雷の危険が少ないことだが、



二枚翼の飛行機上の一郎大伯父

隣接する入間川には陸軍士官学校があり、様々な好条件が整っていたのだ。当時華族出身の陸軍大尉徳川好敏は、フランスのフアルマン飛行学校で操作技術を学び、ライト兄弟の初飛行からわずか八年後の明治四十四年、日本での初飛行に成功した。

徳川大尉はその後、同じ地に操縦士や技術者を育成する学校も作り、その学校の一期生に祖母の十歳年上の長兄が入校した。元々陸軍士官学校で学んでいた大伯父柿沼一郎は、大正時代の初期に操縦士となった。祖母はこの一郎兄を敬愛していた。私もよくこの一郎の話聞いた。今も所沢にある航空公園の記念館には徳川中将（徳川好敏の陸軍での最終位）や柿沼一郎の名が記されている。

一郎は伊勢航空隊まで徳川好敏を乗せて飛んだり、当時日本

が統治していた台湾へ何度も遠征して、多くあった部族間の抗争を止めさせ、台湾の近代化に尽力していたが、四十歳を過ぎたころに現地の風土病に患って客死してしまった。「兄が長生きしてたらねえ…、兄が居なければ今の私は無いと思うよ」といつも祖母は残念がっていた。

祖母の姉の夫『町田氏』は水道技師で、東京に住居を構える華族の屋敷の水道工事を請け負っていた。その中に川崎男爵邸があった。「町田君、今度長男が結婚するが、嫁の身の廻りを世話する若い娘を探している。然るべき家の娘にころあたりがあるかね」と訊かれた。「私の家内の妹が今年十七で、裁縫学校に通っています。柿沼久仁（くに）と言っています、あの徳川様の部下一郎の妹です」「そりゃあいい。直ぐに話してくれないか?」。その頃から新しいもの好きの祖母は、二つ返事で新宿にある川崎男爵家の若奥様づきの小間使いになった。

川崎男爵は爵位は低い富豪だった。九州には炭坑や油田を経営し、中でも『豊田（ほうでん）石油株式会社』からの収益が多く、当主の男爵は貴族院議員も務めていた。祖母が付いた若奥様も、元は大名だった

という家から嫁いで来た人で、そのおつとりぶりには祖母もびっくりしたらしい。「久仁や、あなたはどのよな宝石がお好きかしら?」いきなり問われても本物の宝石など見たことも無い祖母は「見たことがございませんので」と言う。「あら…これの中から選んでごらんさい」大きな宝石箱を開けて見せて貰った祖母は「この赤い石がよろしゅうございます」と言った。「あら、久仁やハルビーなの、私はダイヤが好きよ!」。一事が万事こんな風で、着物や洋服の着換えのお世話なども、人前でもパツパツと脱いでしまうので「お姫様なんてこんなものなのかなあ…」と思っただけ。

男爵家で飼っているシェパード犬『チャンドル』の散歩を、足の速い祖母が受け持つようになると、すっかり仲良しになった。男爵は「久仁や、貴様（きさま）は運動選手になれそうだねえ」と笑ったという。大旦那様である男爵は、使用人に対して名前と呼んだり、貴様と呼んだりした。「貴い人という意味なんですよ」と女中頭の『フジ』さんが笑って教えてくれた。このフジさんは、大奥様である男爵夫人が嫁ぐ時に御実家から付けて来た人で、食事や身の廻りの



園遊の会、左端が川崎男爵



オートバイ隊での勝隆大叔父

万端を仕切る実力者で、執事長が表むきの筆頭職員なら、フジさんは奥むきの筆頭者だった。食事用の肉の注文は新宿駅近くの甲州屋へ「今日は牛ロースを何キロお願いね」と電話すると、昼すぎに大きな肉の塊が届く。何月何日に主人が夜会にお出ましという時は、大奥様、若奥様の結髪を予約する。主人達の夜会服をオーダーする時には、日本橋の三越から外商が馬車でやって来て、寸法とりや仮縫いするための手配などもこのフジさんの仕事だった。

男爵が貴族院へ登院する時は馬車を使う。「大旦那様御登院あそばしまーす」と馬丁さんが声を発すると、奥様方はじめ使用人全員が玄関前へ整列してお見送り、お帰りの時は「大旦那様お帰りあそばしましたー」の声と同時に、何をしていても皆でお出迎えする。一事が万事こんな具合の日々だった。「赤んぼの子守唄だつて『お休みあそばせおしずまりー』なんだからさあ…」祖母はこのような世界があったことを驚くと共に、自分も技術を身に付けて、自分の力

で生き、お金を稼げる人になろうと決心した。

夜会の時の結髪師や、三越の服の仕立て人にいろいろ質問し、結髪師の修行は七年、服の仕立ては十年の修行が必要だと知り、一年でも短い結髪師になろうと決めた。三年の務めの約束が終る頃、男爵が「久仁や、貴様がまだ働きたければ当家に居てもよし、どこかに嫁ぎたければ然るべき人を紹介してもいいが、久仁やはどうだ?」「ハッ! 私は技術を身に付けて自分の力で生きとう存知ます。結髪師の所へ修行に参ります」「そうか、よい心掛けだ。久仁やならできろぞ」と言ってくれた。

は祖母の努力もあったが、師匠の指導も良かったのだろう。当時は美容師試験など無い時代で、数年後試験制度になると同時に第一回目の資格試験に合格し、祖母は晴れて美容師になった。

やがて祖父と結婚することになるのだが、それまでは「出髪(でがみ)」という出張しての仕事が主だったが、祖父の提案で店を持つことになった。従業員も雇うようになり、今の美容院の原形ができあがった。

その頃、祖母の末弟の『勝隆』大叔父は陸軍のオートバイ部隊に属していたが、事故で耳を悪くして困っていた。祖母が男爵に話したところ、ちょうど空きがあった書記専門の執事として雇ってくれた。何という心の広い人なのだろう。人の上に立つ

約束の三年が過ぎて実家へ帰る日、皆が見送ってくれたが、中でもチャンドルとの別れが悲しくて、馬丁さんが綱を引いて駅まで連れて来てくれ、チャンドルと抱き合っ泣いてしまったと言っていた。当初は結髪修行は七年の約束だったが、五年で修業が終ったの

ということは究極、優しさなのだと思う。お陰でカッチャン大叔父は耳が悪くても働けるようになったのだ。祖母がいつも言っていたことは、人生の転機に良い出会いがあったこと、そのチャンスを生かせるかは自分自身の決断であること。度胸だけは人一倍だった祖母を思い出す時、私も一度きりの人生を自分の力で生き抜こうと思うのだ。多くの先人が見守ってくれていると信じている。

段ボール箱の中の古本を整理していた。濡れた雑巾で表面を軽く拭く。面倒なのは値札のシールが貼られている本で、古いとへばりついているので手間がかかる。百均で売っているシール剥がし液を綿棒で塗ってしばらく放置して、付属のヘラでこそぎ落とす。

古い文庫本を取り上げた。岩波書店が出している倉田百三の「出家とその弟子」、タイトル文字が現在とは逆に、左から右に並んでいる。それだけで、戦前の本だとわかる。(うん?)

何かが挟んである。かなり大きな物だ。ページを開くと、二つ折りにした葉書が出てきた。古いものでかなり変色している。

「軍事郵便……」

宛名の面の切手を貼る箇所の下に、赤い文字でそう印刷されている。毛筆で宛名は書かれているが、切手は貼られていない。投函しなかったのだろう。裏面を見ると、達筆な草書である。

「文吾さん、出番ですよ」

清掃が終わった本を物色していた山本文吾さんに手渡した。文吾さんは古文書が読めるのだ。現代文の草書であれば、よほどの悪筆でなければ

問題ないだろう。

持参の缶コーヒーを一口飲んで、老眼鏡を掛けなおした。

「これは意地が悪いな。わざと文字を崩してある……」

口の中で何やらつぶやきながら、しばらく葉書を睨んでいた。

「なるほどな」

読み終えて、缶コーヒーに手を伸ばした。

## ラブレター (前編)

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑩5

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「これは遺書……、いや熱烈なラブレターだな」

得心したように頷いた。

「で、なんて書いてあるんですか?」

催促した。明かに勿体をつけている。

「親鸞聖人様、わたしのような人間でも往生できるのでしょうか。わたしは悪人です。敵機の操縦士だけでも五人の命を奪った殺人者です。母国

に帰れば、愛する家族が待っていたでしょう。それを奪ったわたしは大悪人です」

この葉書が、「出家とその弟子」に挟んであった理由が理解できた。浄土真宗の宗祖、親鸞とその弟子の唯円を中心とした戯曲で、大正六年に岩波書店から単行本が刊行されると大ベストセラーになった。

親鸞の教えを書き記した仏教書に

おさら往生できるので、と断言している。悪人は親鸞自身のことでもある。いくら修業を重ねても煩惱を消し去ることはできず、人間の本質は欲深い悪人であると思知らされる。その罪深い人間を救うために仏の教えはある――。

「明日の出撃で、すべての銃弾を撃ち尽くしたあとは、皇軍の英霊となる覚悟はできております。天涯孤独の身の上が僥倖です。ただ一つ、最後にあなたの面影を思い浮かべることをお許しください。好きでした。」

葉書を読み終えた後、二人ともしばらく無言だった。

「検閲に引つかかるから、これは出せないな。住所が書いてないから、投函するつもりもなかったんだろがな」

文吾さんの言葉に頷いた。軍事郵便は、戦地にいる兵士と内地(日本)の家族のやりとりを利用されていて、軍事機密に関することはもちろん、少しでも戦争に批判的なことを書けば軍法会議にかけられて処罰される。

「しかし、この葉書や本が残っているとすることは、この人は戦争を生き延びたんでしょか?」

葉書には本人の署名はないのである



る。宛名に「神杉綾乃様」と書かれていた。相手の名前を書き残したいという気持ちはよくわかる。

「どうだろうな。遺書かもしれないが、誰かに読んでもらうために書いたんじゃないような気がする。まして、生き延びたんなら、処分すると思うがな」

首肯した。自分でもそう思うと思っただのである。

大阪の大学に通っている中谷啓

介君から、丁寧な手紙が届いた。軍事郵便の葉書が挟んであった本を含めて、段ボール箱に入った古本を持って来た人物である。例の葉書の内容は電話で報告し、郵便で返却していた。

あの「出家とその弟子」の本は、啓介君の曾祖父、中谷耕蔵氏の蔵書だったことがわかった。しかし、家族や親戚に確認して、耕蔵氏にも軍隊経験はあるが、歩兵部隊の配属で、飛行機乗りではなかったことも判明した。あの葉書の文面を書いた人物ではないのである。

神杉綾乃の名前で手がかりがあった。啓介君の高校時代の同級生に、神杉姓の女子生徒がいたのである。その神杉加奈に電話をかけてみた。珍しい名字なので、ひよっとしたらと期待した。ビンゴだった。加奈の曾祖母が、神杉綾乃だったのである。自動扉が開いた。

「お久しぶりです！」

元気な声で入って来たのは、以前に何度か来てくれたことのある女の子だった。今年の春に高校を卒業していた。尾道の看護師学校に通うと言っていた。親もとを離れて少し大人びたか。

「こんにちは」

彼女の後から中谷啓介君が姿を現した。

「あれ？ 一緒に？」

啓介君が頷いた。

「彼女が神杉加奈さんです」

驚いた。名前を知らない客も多いのである。

「墓参り？」

啓介君が頷いた。切り花の束を手にしていた。今日は九月二十日、彼岸の入りである。神杉綾乃さんの墓前に、あの葉書を見せに行くのだという。

「二つ、発見がありました。彼女の実家に、戦前の高等小学校の卒業名簿が残っていたのですが、そこに神杉綾乃と中谷耕蔵の名前が載っていました。二人は同級生だった……だとするところの謎のゼロ戦のパイロットも、同級生の可能性が高いんじゃないですかね」

ニヤリと笑った。

「また何かわかったら報告します」

二人が会釈して、店を後にした。

「乾杯しよう」

文吾さんがポケットから缶コーヒィを取り出して開栓した。

「何にですか？」

「若き二人の青春と永遠のラブストーリー！」

## まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
  - 定休日：毎週日・月・火曜日
  - TEL: 090(9913)3052
  - 営業時間 9:30～18:30 (昼食休憩 12:00～12:30)
- ※広島銀行庄原支店の手前(三次側から) ※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

# 「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

## 第四部 祭事を見る

### 十二月五日 納めの水天宮

毎月五日は水天宮の縁日だが、十二月五日は納めの水天宮という、縁日の最終日でにぎわう。福岡県久留米市、東京都中央区日本橋の水天宮は有名だ。

水天宮は江戸時代から水徳の神として安産や水難除け・火災除けに霊験があるとされている。水天というのは、インドの水神のことである。

久留米市の水天宮は、安徳天皇とその母の建礼門院たちの主神にして、全国にある水天宮の総本社として有名。そして、舟人の守護神として強い信仰を集めている。

また、東京都日本橋にある水天宮は、水神および安産の守護神として信仰を集めている。

### 十二月十日 納めの金毘羅

毎月十日が縁日である。一月十日は「初金毘羅」で十二月十日が「終」



ま)い金毘羅」で特に信者の信仰があつた。

日本でも、海上の守護神として祀られ、船人が最も崇敬する神となり、この神を祀る香川県琴平の金毘羅宮は、江戸時代後期には伊勢参りとともに、金毘羅参りとして大変盛んであり、全国的にも有名である。ほかに、東京都虎の門の琴平神社などがある。

### 十二月廿一日 終い弘法(大師)

その年最後の弘法大師の縁日という。終(しま)い大師・終い弘法・果の大師などとも言われる。

京都の東寺の終い弘法(十二月二十一日)は、北野の終い天神(十二月二十五日)と並び称され、正月を間近に控えにぎわう。また関東では、厄除けで有名な川崎大師が前夜からにぎわう。

弘法大師は、承知二(八三五)年三月二十一日に入寂したので、真言宗の各寺院では、三月二十一日に御影供(みえいく)を行い、各月の二十一日を縁日としている。

### 十二月廿四日 納めの地蔵

その年最後の地蔵菩薩の縁日という。この日は、地蔵菩薩を祭るお堂は多くの参詣人でにぎわう。

日本では、多くあごひげや髪の毛を剃り落とし、袈裟を着た形相圓滿

な像を石で刻み、左手に宝珠、右手に錫杖(ようつえ)を持つ姿が一般的である。全国各地に、この石像を路傍にたて、香花を供えて祀る風習が残っている。地蔵尊の代表ともいうべき東京都巢鴨の「とげぬき地蔵尊」の大祭は、特にお年寄りの信仰を集めている。

俗説では、地蔵は子供の成長を守り、その死後、賽の河原で苦難を救うと伝えられ、子供の守護仏として信仰されている。

### 十二月廿五日 終い天神

菅原道真の命日あたる旧暦二月廿五日にちなんで、毎月廿五日が縁日である。一月は「初天神」、二月は「天神祭」、十二月は「終い天神」であり、廿四日を「宵天神」、廿六日を「残り天神」といわれている。境内では、梅の造花をつけた枝に小判などを付した縁起物などが売られる。

天神は菅原道真の神号でもあり、道真を祭神とする天満宮をいう。後に京都に北野天神が創建されたことに由来する。そして、道真は学問の神様としても有名である。

※第四部は、これで終了し、次号からは「第五部 人物を見る」をスタートさせて頂きます。

# ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(12)

マック☆ヤマザキ

3月1日木曜日、インターラーケン(スイス)。朝7時半起床。天候が心配でロビーに降りていくと、ホテルのオーナー夫人が残念そうな顔で、

インターラーケンからの登山鉄道は、昨夜来の強風で樹木が倒れていて、一日中ストップだと告げた。

その代わりに、学生達には日帰りでベルン(スイスの首都であり世界遺産に登録されている美しい街)への旅行がよいであろうとアドバイス。それによると、駅から毎時44分発で約1時間、旧市街が中世の面影をそっくり残っていて、ほかの都市にはないしっとりとした落ち着きが堪能できるとのこと。これらの情報を急いで掲示板にしてロビーに貼りだした。そして8時のモーニング・コールをする。ユングフラウヨッホの情報をもっと仕入れるため駅に向いた。

レンタサイクルは、夕方まで借りると5スイスフラン(約450円)、コイン・ランドリーの場所を絵で示し、洗濯屋さん是一日仕上げで13スイスフラン(約1200円)だと掲示した。

夕方になって、明石君がレンタサイクルで高速道路を走っていて警察

に捕まったとの報告。当人はどこにいるのかと尋ねると、もう部屋に帰りましたとのこと。ひとまず安心! 彼の話では、サイクリングをしていて知らない間に高速道路に乗り入れてしまったらしい。しばらく走っていたら、パトロールカーがやってきて、判らない言葉(?)で散々怒られた。

この後に、まだオチがついている。湖沿いをサイクリングしていて、途中で、景色のいいところで自転車を止め、写真を撮ってホテルに帰ろうとしたとき、鍵がかかって動かないことに気付いた。誰かがいたずらして鍵をかけてしまったようだ。彼は仕方なく自転車を担いで駅まで帰り、鍵の紛失代を払われたそうである。他の学生たちは買い物に出かけたリ、サイクリングを楽しんだり、ベルンに出かけたりして、ユングフラウヨッホに登れない分を楽しんでいたようだ。

私の昼間の行動は、スーパーマーケットでサラダ用の野菜、卵、ハム、スプライト等を買った。洗濯屋でたまった下着類を洗濯してもらった。神戸の自宅にファクシミリを送った。年間100日近く海外に出かけるため、ファクシミリという文明の利器

を購入。通話に比べて経済的であり、文章が相手に届くので時差(冬時間のスイスの朝8時は日本では16時)を気にしないで済むのも便利だ。それにしても、4年間も続けて同じ季節にインターラーケンに来たけれど、こんな悪天候は初めてである。

夜、ホテルの玄関のドアに鍵をかけようとロビーに降りていくと、吉見君がひよっこり帰って来た。「バスでユングフラウヨッホまで登って来ました」と言われて背筋に寒気! 無事に帰って来たからいいものの、今日の山は危険だという掲示板の注意が守られていない。36人もいると、36様の個性が交錯してこんなこともあるのだろうか、一瞬ヒヤリとさせられた一日だった。

ベルナーオーバールンド州発行のパンフレットによれば、3巨峰のユングフラウ(4158m)、モエンヒ(4099m)、アイガー(3970m)の山の継ぎ目の平らになった部分のことをドイツ語で「ヨッホ」と言う(先月号に絵で説明)。ユングフラウとモエンヒの間のそれが、ユングフラウヨッホである。ユングフラウの駅はヨーロッパ中で最も標高の高い鉄道駅で、富士山より78mも高く1912年(大正元年)に開設されている。





# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：10月18日(土) 9時30分～11時30分

テーマ：「古代からの交通路  
としての比婆山」

講師：稲村秀介氏

(帝釈峡博物館施設時悠館主任)

場所：交通交流施設1 (JR 庄原駅隣接)

参加費：500円

(学生 200円、お茶菓子代込み)

申込み&問合せ：080-3631-9125 (やない)



## 徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家(徳岡佛性坊)として多彩な  
活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品  
の展示販売を、どらくろあの一隅でしてい  
ます。

茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を  
展示しています。あなたのお気に入りの逸  
品が見つかるかもしれません。

※天井が低いので頭上注意!

## どらくろあ無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な地元産の野菜を店頭で販売

(値札のないものは百円均一)。

毎週水曜日の朝に入荷予定。

黒ニンニクの販売は諸事情にて終了いたしました。

## 「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

### 幼児教育の必要性についての Q & A

Q: 集中力も幼児期の育てられ方で決まってくるのか?

A: 子どもが自分の意志で遊ぶおもちゃを選んだり、大人がゆったりとした気持ちで子  
どもの行動を見守ったりすることで、自主性が育ち、集中力がついてきます。当教室では、幼児に単に「か  
ず」や「ことば」の世界を広げるだけではなく、お子さんの能力のちょうどのところを繰り返し学習すること  
で「学習意欲」や「集中力」を育てています。



無料体験学習受付中!!

## 編集後記

◇ 8月23日に庄原よい  
とこ祭開催、これで庄  
原の夏は終りですが、  
まだまだ残暑は長く、  
辛そうです。次号こそ  
は木次線ストロールの  
予定なのですが、炎天  
が続くようならもう一  
月待った方が良さそう  
ですね。

◇ よいとこ祭のパレードで  
象に残ったのが自衛隊の装  
甲車、新隊員募集のアプリ  
ルなのですが、時代を感じて  
しまいました。  
◇ 店頭で育ったツバメの雛  
は、3羽とも無事巣立ちまし  
た。炎天下の中の子育て、遅  
しいですね。見栄えが悪い巢  
も意外と丈夫で持ちこたえ  
ました。来年も元気で帰って  
来いよ!  
◇ 秋は、早く来い!!

発行：どらくろあ

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

第287回

くんちいち

# ひょうばあ九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



9月9日(火)

9:00～12:00

※残暑対策で営業時間短縮！

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」  
9月8日(月)～10日(水) 10時～15時  
「レザー作品展」

★アロハカフェ(場所：セラ百貨店前)  
ハワイのコーヒー販売

★どら書房、休憩室あります。

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド タピオカドリンク 100円引き

★庄原特別支援学校(場所：楽笑座)  
お菓子、木工品等の手工芸品販売

★お休み処(まちなか広場)あります！

★あなたも自分のお店を出してみませんか？(出店者募集中！)

\*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～  
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285  
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10(楽笑座内)

【ホームページ】  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

